

## ■魚道～魚がのぼりやすい川づくり～

川に住む魚のほとんどは日常的に川を上ったり、下ったりして生活しています。このような魚たちが思い通りに川を行き来できるよう、障害になっている堰などに、上り下りできるよう魚道を設置したり、あるいは改善したりしています。

多摩川では、多摩川水系で確認された天然分布魚種のなかから、重点対象魚種8種類を選定し、選定した8種類の生息域を考慮しながら、魚道の新設・改築を行っています。

### 重点対象魚8種



**アユ(アユ科)**

アユは平安時代の文学「源氏物語」などにも登場し、古くから人々に親しまれてきた魚で、日本を代表する淡水魚です。古くから漁業、釣りの対象で、多彩な伝統漁法があります。



**ギンブナ(コイ科)**

中流から下流まで分布。染色体数が多い集団の卵は、ギンブナ・コイなどの精子の刺激を受け、孵化するのではないかと考えられています。しかし他の魚の形質を受け継ぐことなく、生まれる子は生粋のメスのギンブナの子です。



**ヤマメ(サケ科)**

上流域の冷たく澄んだ水を好みます。体に美しいまだら模様があり、その清楚なイメージから「溪流の女王」とも呼ばれています。また、美味であることから食用としても親しまれています。



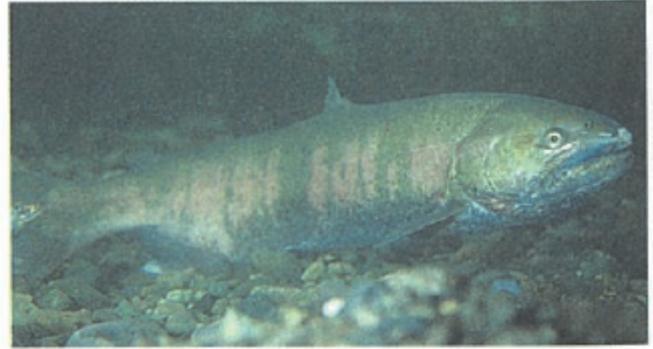
**マルタ(コイ科)**

コイ科の魚では唯一、川と海を往復する種類。ウグイによく似ていますが、かなり大きくなります。最近魚道の効果もあり、大丸用水堰付近まで遡上が確認されています。



### ボラ(ボラ科)

淡水と海水を行き来できる魚で、ごく小さい時はオボコまたはスバシリ、淡水に入り込んでくる頃をイナ、海に帰り成長したものをトドなど、名前を変える出世魚としても知られています。



### サクラマス(サケ科)

上流域で生まれたヤマメの中で、銀毛(スモルト)化し、海へ降りたものがサクラマスとなります。サクラマスの多くはメスで成長後、再び生まれた川へ戻って産卵します。



### ヌマチチブ(ハゼ科)

中・下流に分布し「ダボハゼ」の名で子どもたちに親しまれています。はらびれの変形した吸盤を使い、川を遡上します。成魚は川底で生活しています。



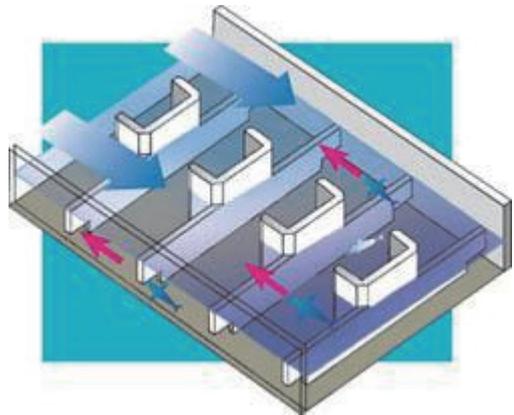
### ウナギ(ウナギ科)

河口付近から上流まで広く分布。成魚は小魚などを食べ、大きなもので体長1mまで成長します。海へ降りる卵を持った下りウナギは、まるでツチノコのような姿になります。

## 多摩川の主な魚道の構造

### アイスハーバー型魚道

魚道の中央部に非越流部（水が流れない部分）があり、両側の越流部（水が流れる部分）の下に潜孔があります。魚道中央部の水が越流しない部分の下流側では、流れが穏やかな水面が確保され、魚が休憩できるようになっています。水量の増減に余り対応できないため、潜孔が土砂で詰まり易いという欠点もあります。



### ハーフコーン型魚道

多摩川で開発され「大丸用水堰」に最初に設置された魚道です。プール間の隔壁が半円錐型をしていて、側面に沿った水脈が緩やかな流れを作り、降下する稚魚には優しい流れを、遡上する魚には流下断面が三角形なので、流速も色々に変化し適切な経路を選べます。さらにプールが浅く、らせん状に流れるので土砂が堆積しにくいという特徴もあります。

